

# 深川寺町の形成と文化財

江東区深川江戸資料館

葛飾北斎が描いた『絵本隅田川兩岸一覽』（文化3年・1806刊行）という画本の中に、「市中の花・新寺の新樹」と題された1点があります。桜が満開に咲いた隅田川の西岸（中央区）から対岸の深川を眺めて描かれたこの絵は、その表題の通り、新寺とよばれた靈雲院を深川を中心とみえています。

深川は、寺の多いところです。関東大震災の被害を受けたあと区外へ移転して行った寺を除いても、現在でも白河・三好・平野・深川1・2丁目・清澄あたりに約70か寺が集まっています。多くの寺院が集中しているこの周辺は、深川寺町とよべます。

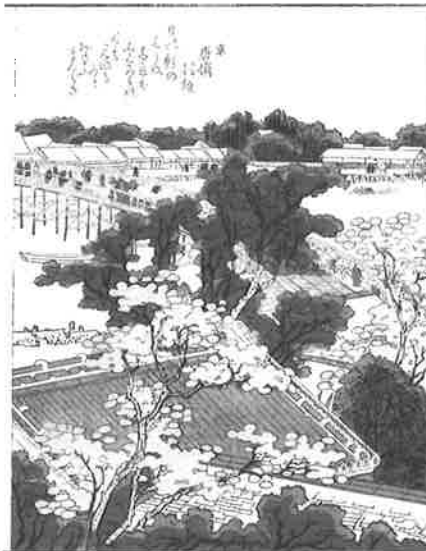
## 深川寺町の形成

隅田川の東岸に位置する深川地域は、江戸時代の初めに小名木川の北側が開発されます。そして、寛永6年（1629）に深川獵師町が形成されると、そこに寺院も創建されていきます。しかし、これらは、深川の開発が進むにしたがって移転を余儀なくされるようになりました。玄心寺と法乗院は、寛永18年（1641）獵師町から寺町へ移転しました。江戸の市中からは心行寺・恵然寺が移転してきて増林寺・陽岳寺・海福寺が創建され、いわゆる深川七軒寺町（現在の深川2丁目）が成立しました。

明暦3年（1657）に江戸で起こった大火を契機に、隅田川東岸の本所・深川の開発が本格化します。

万治2年（1659）には両国橋が架けられ、翌3年、本所奉行が新設されました。この時期、幕府の都市計画に基づき、おおくの寺院が深川に移転してきました。

浄土宗靈巖寺は、万治元年（1624）に靈岸島から深川に転入しています。浄土宗本誓寺は、天和2年（1682）に馬喰町から、同雲光院は、馬喰町で大火に遭い、神田岩井町に移転したのち、深川に転入しています。また、同法禅寺は、やはり馬喰



『絵本隅田川兩岸一覽』より「新寺の新樹」



町から同3年（1683）に深川に転入しています。日蓮宗浄心寺は、万治元年に創建されています。

これらの共通点は、明暦の大火で焼け出されたこと、開基が幕府の関係者であったことが特徴的なこととして挙げられます。そして、これらの寺院は、七軒寺町の北の、仙台堀と小名木川に挟まれた地域（深川1・2丁目、平野、三好、白河、清澄あたり）に集められ、深川寺町が形成されました。

## 寺町の寺院と徳川家

明暦の大火の後、深川に転入し、深川寺町を形成した各寺院の開基を見てみましょう。開基とは、寺院創建のとき経済面を支える信者のことで、僧職ではありません。

本誓寺の開基は、英勝院（徳川家康の側室お勝の方）です。雲光院は、家康に仕え、2代将軍秀忠の子和子が中宮となるにあたって、その母代わりとなって仕えた阿茶局の開基です。雲光院という名は、阿茶局の院号です。

浄心寺は、4代将軍家綱の乳母三沢局を開基としています。

また、靈巖寺は、家康・秀忠・家光の3代が帰依した雄誉靈巖が開いた寺であり、法禅寺は、文禄2年（1593）家康の意向で諸堂を造営したという歴史を伝えています。ともに開基ではありません



左：靈巖寺全景  
右：上・松平定信墓 下・銅造地藏菩薩坐像（江戸六地藏の一つ）



が、徳川家との関連を伝えています。

格によって特別の待遇を幕府から受ける寺院を「格寺」とよびます。明暦の大火の後深川に転入した寺院のうち、雲光院・本誓寺・法禅寺・浄心寺は、格寺のうち、独礼の格式を持つ寺院です。独礼とは、将軍に単独で拝礼を許されるものことです。また、靈巖寺は、壇林（僧侶の養成機関）の寺として別格でしたから、明暦の大火以降深川に転入してきた寺院は、すべて高い格式をもつ格寺であったこととなります。

明暦の大火で深川に転入してきた寺院の総坪数は、6万坪にも達しました。さらに徳川家ゆかりの寺院が創建し、これらは寺院と徳川家あるいは大名家が直接の関係を保ちながら発展していきます。檀家は、寺院内の塔頭が引き受ける形をとりますが、それも深川転入前の隅田川西岸の人々が大半であって、深川には檀家が非常に少なく、地元とはこの時期きわめて関係の薄い存在であったことがわかります。

## 深川寺町の文化財

このような歴史を持つ深川寺町の寺院には、江戸時代の大名や有名な人々の墓を始めとした史跡が多く残されています。これらは、江東区指定または登録文化財（史跡）として、保護されています。これらの主なものを紹介してみましょう。

靈巖寺には、寛政の改革の推進者松平定信の墓があります。定信は、8代将軍吉宗の孫にあたり、白河藩主となります。のち、老中となって、幕政の改革に努めました。定信の墓は、国指定史跡に

もなっています。有形文化財では、露座の大きな地藏菩薩坐像が東京都指定文化財にもなっています。

本誓寺には、国学者村田春海の墓があります。町人国学者として名高い彼は、松平定信とも親交があったといわれます。本誓寺には家康について江戸に来た漢方医呂一官の墓もあります。彼は、口紅の製造でのちの柳屋の業祖といわれています。有形文化財では、珍しい迦楼羅像があります。

浄心寺には、開基の三沢局の墓をはじめ、清元節の創始者初代清元延寿太夫、歌舞伎俳優の初代・2代坂東彦三郎の墓などがあります。

雲光院には、開基の雲光院殿（阿茶局）墓を始め、吉原の創始者庄司甚右衛門の墓などがあります。前述の阿茶局の墓は、寛永14年（1637）の年号が刻まれたみごとな宝篋印塔で、有形文化財となっています。

深川は、明暦の大火を境に急速な発展をとげていきます。元禄になると、寺院の深川移転と同様の理由から、火災や延焼の原因になりやすい木置き場が隅田川の西岸から深川に移され、元木場を形成することになります。

深川という土地の形成と発展を考える上で、寺院の移転、深川寺町の形成は、重要なポイントです。